



坂本新
福岡情報ビジネスセンター
コグニティブサービス事業部長

と説く。コグニティブサービス事業部長を務める坂本新執行役員は、現状について「企業の関心は高く、どのような使い方ができるのかという段階から具体的な要望まで、さまざまな相談が寄せられる」と話す。

同事業部が手掛けた導入事例では、営業活動の中で顧客情報や進捗をデータとして管理する営業支援システム(SFA)にAIを組み込み、過去の成約事例などを分析し、成約に繋がりやすいタイミングや条件を提案するシステムがある。また、福岡には通販企業の事業所が多くあることから、コールセンターで受けている問い合わせ対応

に、メッセージなどで自動応答する「チャットボット」を取り入れる企業も増えているという。

坂本事業部長は「通販や小売、製造、金融など多くの業態に、AIの活躍の場がある」とした上で「現在は案件に合わせてシステムを構築しているが、将来的にはカスタマイズが可能な一つのプラットフォームを提供し、ユーザー側が社内開発で使えるようなものにしていきたい」と方針を語る。

武藤社長は「IBM社でのAI研究は80年代から進んできたが、コンピュータのCPU(中央演算処理装置)のデータ処理能力に限界があった。今では能力が高度化し、膨大なデータ処理が可能となっている。さらに個人レベルまでパソコンやスマートフォン、タブレット等の普及が進み、3年ほど前からAIが特

別なものではなくなってきた」と昨今の状況を表し、今後について「ビジネスの領域で一般化が進むと、当社のようなシステム開発企業の仕事も変わってくる」と見据える。

従来からシステム開発・運用業務の多くは専門企業に外注されてきたが、AI導入を機にユーザー側が目的に応じて開発・カスタマイズできれば、内製化される部分も増えるだろう。武藤社長は「AI活用は、単純作業の効率化から需要予測やマーケティングなど事業計画に関わる領域にまで及んでおり、これまでに以上に直接的にビジネスの成否に影響してくる。われわれITベンダーにもユーザー目線のビジネス感覚が求められる」と役割を認識する。

企業とともに活用法を考えていく動きの一環として、坂本事業部長は、

IBM社のクラウドサービス「IBM Cloud」のユーザーを中心とした勉強会「BMXUG九州支部」の代表を務め、月に1回開催する勉強会で講師を務めている。福岡を中心に九州各県の企業から参加者が集まっているといい「農業や観光など、九州にはAIとの親和性が高いテーマが多くある。また、地方で特

に深刻化している人手不足や後継者難などの課題解決を支援したい」と意気込む。武藤社長は「将来的には、AIが安価で安全、すぐに使える水道のようなインフラになれば。当社も使いやすいプラットフォームを追求するとともに、ビジネスパートナーとして事業ビジョンを考えていきたい」と力を込めた。

最も重要な「アイデア」は人次第

人間にしかできない仕事は必ずある。AI活用の前提として最も重要な「AIを使って何ができるか、何がしたいか」というアイデアを出せるのもまた、人間でしかない。事業者目線だからこそ生まれるアイデアを持つ企業や、その実現を支援する開発企業が集まる福岡を舞台に、さらに新しい活用モデルが生まれていくことに期待したい。

AI専門部署での実績拡大

福岡情報ビジネスセンター ビジネス目録で導入支援

各種情報システム開発、ITコンサルティングの(株)福岡情報ビジネスセンター(福岡市博多区博多駅前3丁目、武藤元美社長)は16年、IBM社「ワトソン」の機械学習プラットフォームを軸とするAIシステム構築や運用支援を手掛ける「コグニティブサービス事業部」を立ち上げた。

武藤社長は「当社では



武藤元美
福岡情報ビジネスセンター
社長

AIを「人間の意思決定をアシストするもの(Cognitive)」と捉えている。人工知能という言葉からは、それ自体が人間に代わって考えるような印象を持たれることもあるが、多くの情報やデータを知識として蓄え、分析し、傾向を示しているもの」と定義し「AIを使うには、まず学習させるためのデータが重要。今日では多くの業種で記録がデータとして蓄積されており、使える材料が豊富にあることが、ビジネスにおける導入拡大の理由の一つ」